

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	これからの医学・医師教育に思う
別タイトル	Thinking about the future of medical education
作成者（著者）	岡住, 慎一
公開者	東邦大学医学会
発行日	2023.12.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 70(4). p.144 145.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	巻頭言
著者版フラグ	publisher
JaLDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.2023 030
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD10214702

これからの医学・医師教育に思う

岡住 慎一

東邦大学名誉教授

JCHO 千葉病院院長

元佐倉病院外科教授

私は2008年に佐倉病院に外科教授職として着任し、以後15年、東邦大学で診療・教育・研究活動に携わり、本年退任致しました。在任中、副院長として病院運営にも関わり非常に濃密な年月を経験することができ、感謝しております。退任時には高松学長から、「65歳の健康余命はまだ15年あるので頑張りましょう」と励ましのお言葉を賜り、現在は市中病院（老健施設長兼務）にて新鮮な毎日を送っております。この度、本稿をご依頼いただいた機会に、これまでの心に残る言葉を順に記し、今後の医学・医師教育について所感を述べさせていただきます。

「学びて思わざるは則ち罔（くら）し。思いて学ばざるは則ち危うし。」

論語の言葉で、医学部卒業時の医学部長の訓示です。どんなに勉強していても理念がなければだめであり、逆に理念が立派でも勉強を怠ってはいけないという意味ですが、ともすれば片寄りやすいので心しましよと穏やかに仰っていたのが逆に強く印象に残っています。今後は、AIも普及し標準的な解答がさらに容易に得られるようになりますが、逆に益々「考える」ことが医師に重要となるものと考えます。

「患者をよく診る」

入局後、研修医担当の先輩医師に何度も叩き込まれました。医者は患者から学ぶものであるとよく言われます。適切な処置を行うためには、断片的な情報だけではなく、継続した情報、それも自分の目で診断した情報が不可欠です。特に外科の患者の容態は刻一刻と動的に変化するため、適切な処置もreal timeでなければなりません。今後は「医師の働き方改革」と「医師のあるべき働き方」の両立が重要な課題となりますが、指導医のしっかりとした見識と指導力がさらに求められます。

「常にフロンティアスピリットを持つこと」

かつて、米国から透析医療を本邦に導入された先輩がい

つもおっしゃっていました。未解決の医学的な課題に取り組み新たな知見を得る作業は、大学病院の医師の特権であり、責務でもあることを端的に示しています。結果達成できたならば、喜びは代えがたいものとなります。ぜひ後輩に感じてもらいたいと思います。

「まず始めること。そして続けること」

テーマを決めて取り組みあきらめずに続けることが成功の条件である、との入局した教室の教えです。医学研究のみならず、すべてに通じる心がけとしていつも念じております。

「先輩は後輩のために」

研修時代の部長の言葉です。ご指導に御礼をのべたところ、「先輩は後輩を教え面倒を見るのが当然の仕事です。もし感謝しているのなら、今度は君が後輩に返しなさい。」と話されました。その後、自分でも後輩にそう述べることにしております。

「同業の人に対しては之を敬し、之を愛すべし。たとひしかる事能はざるも、勉めて忍ばんことを要すべし。決して他医を議することなかれ。人の短をいうは、聖賢の堅く戒むる所なり。彼が過を挙ぐるは、小人の凶徳なり。人は唯一朝の過を議せられて、おのれ生涯の徳を損す。其徳失如何ぞや。各医自家の流有て、又自得の法あり。漫に之を論ずべからず。老医は敬重すべし。少輩は親愛すべし。人もし前医の得失を問ふことあらば、勉めて之を得に帰すべく、其治法の当否は現病を認めざるに辞すべし。」

緒方洪庵の「扶氏医戒之略」の一節です。外科のみならず現在の医療は、医師、看護師、コメディカルとのチーム医療であり、相互のレスペクトがなければ成り立ちません。その基本的心構えが既に江戸時代に講義されていたことに感銘をうけます。現代の「医療安全・医療の質」のためにも必須の言葉と思っています。

「しずかに自分の心を大自然の偉大な力に通わせながら、

人間として生きられるだけ生き、そして、社会のため、人類のため働けるだけ働いてみようではないか」

学祖の建学精神は、校風、教員気質、病院運営における脈々としたよりどころを感じています。コロナ期も継続開設した本学の西穂高山岳診療所もしかりで、入山時にはい

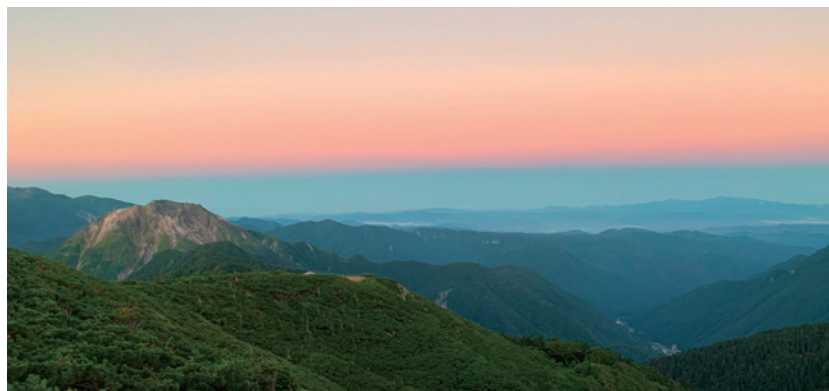
つもこの言葉を思います。

今後のさらなる本学の発展を念じて稿を終えます。有難うございました。

DOI: 10.14994/tohoigaku.2023-030



学祖 額田晋先生 自然・生命・人間 額 佐倉病院 蔵



西穂高診療所 裏山からの朝焼け